

提 言

子どもたちに多様な選択肢と価値観を

内山 聖 (新潟大学小児科)

昨秋、ミネソタ大学を訪問した折、先方の医学部長が「ノーベル賞授賞式晩餐会のナイフとフォークは燕市で作られている」ことを教えてくれた。最初はわが英語力を疑い、次にわが耳を疑い、最後にわが新潟県民としての適格性を疑った。人気の iPod も燕市で磨かれているという。何だかとても嬉しくなった。

日本の社会は昔から職人に支えられ、職人も今以上に社会から大事にされていた。職人芸、職人肌、職人氣質などいずれも一級の誉め言葉である。しかし、経済至上主義が社会に浸透した結果、物づくりの最終段階を担う職人がまず割を食ったのではないか。それでも最近はマスコミの扱いなどが変わり、「クラレ」が新一年生とその親に行った将来就きたい職業のアンケートでは、男子の5位、親の希望の7位に職人が入っている。しかし、全国高等学校PTA 連合会の調査では、高校2年生になると希望の職業の10位までに職人は入ってこない。

一時、運動会で順位をつけないことが話題になった。40数年たった中学校同級会で、職人になった友が、「勉強はまったくできなかつたが運動会では誰にも負けなかつた。」と今でも誇らしげに言う。勉強ができて、いい大学、いい会社に入ることがすべてという価値基準だけでは、そこで下位の者は逃げ道がない。

学校でのいじめや若者による凶悪犯罪など、このような土壌に因があるような気がしてならない。短絡的に職人になれというのではない。弱者に思いやりのある心豊かな社会を築くには、子どもたちの選択肢を広げ、多様な価値観による評価を行い、社会全体で生きる土俵をたくさん用意してあげることが大切だと思う。



先輩と後輩, ツーショット

写真提供 内山 聖